



近世說美少年錄
六編
壹

~ 13
3567
26



13
3507
20

曲亭翁口授編

大學圖書
昭 34.6.3
藏 書

近世說美少年錄 五冊

一陽齋豐國畫

文榮堂 精刊
群玉堂

新編石童子訓 第三版附言

本編第三集第三十回付末朱之次が住吉の岸松屋を尋てゆ折
其路傍より尻掛酒肆にて十三屋九四郎の邂逅を段々他が年歳を四十あ
まりの一とある當時朱之次がち見を推量せりといふ九四郎實を
是時三十歳許るべし。何とるべ後版第三十回以下九四郎の女兄臆
祿の年二十五歳を身故の是年其子大江四郎の南の九歳之是より亦
八稔を歴て廿四郎十六歳あり。時九四郎の朱之次と相逢ふ已が宿所を留
在り。その時心臆祿猶世に在り正に三十歳を九四郎の臆祿の弟を
三十三歳許るべしといふ見ふ其面影の老あり弱なるはありねば朱
之次が認て四十ありありと思ひ第三十回以下九四郎の年歳を幾
歳といふ文ありれば看官思慮の致を作者の評注を聊思記せぬと又



曾根見五郎平
宗玄

生死の海に舟を
かたむけしは
身をばか
半間人

枸杞村盆
九郎



長橋俊太郎
勢泰

義維重於君
命臨難共忘
厥身

象船并弥
知量



高嶋長江
とさへ往

昔の世に
根をたぐり
人小むく
庭の袖垣
玄同老人

津問屋集三
おとと

玉石

大坂



舊泉流不竭
新司掃知清

福富阿健
おとと

御教書

一口鬼太夫
安倍

三石

大坂



高嶋硯吉郎
 女純
 驚奇痴豊

高嶋硯吉郎
 女純

重出浪華四摠
 重出浪華四摠

重出浪華四摠

五



狂婦有狂婦
 之勇何及使
 者之雄哉

狂
 獠

狂婦巨楯
 狂婦巨楯

重出十三屋九四郎
 重出十三屋九四郎

重出十三屋九四郎

重出十三屋九四郎

和漢の神史物の本の作者多く古人の姓名小塚して一部の小説を作設
 する何ぞ蓋編中の人物世に於て婦幼も耳目小克熟る將相勇士の
 類小あざざれば其一部の世界不立看官も亦據あざざれば飽ぬ心地とるれば
 是をの事事を故事小借て義を勸懲小作せの事との故小毛氏琵琶
 記の評注小蔡邕を評せり。後漢の蔡邕小あまのまなり。あまのまなり是同
 名異人と見えべし。其言老實小過ださふ似されざる蒙昧の為小
 解んぬ實小是致言といふ。然るを克思ひざる者其正史小合さる歳
 月の錯へを詰りて論さるもあは笑へし。神説傳奇架空の言只情態を
 寫し以て且善を勸悪を懲さを作者の本意と做せ或は是を無用の技と一或は
 是を有用の物を無用の中より有用あり有用の中より無用ありあは好憎を以て褒貶
 せ私論めて廣く取捨人々の意衰あはべし。曲亭老人重識

新局玉石童子訓卷六之十一

東都 曲亭主人人口授編次

第四十回

観音寺の城小衆少年武藝と呈ま
弓馬槍棒主僕朱之介を懲さ

復説辛踏吾足齋延明の日の早旦より未朱之介とて観音寺の
 城内より賀典膳政朝の宿所小赴く程小朱之介の身装の早小整ひか
 かりと袴の昨日阿夏老芋が隣家より借りて来る時服と腰刀の五足齋
 副衣副刀と取めて被せの多佩せるも頭顱額髪と剃殘して十六七なる
 少年の像くふ作り做しける朱之介の猶飽まあはれ情地の鏡台より白
 粉と取半と薄化粧さあさるか心術を奸悪るち見世小言うらぬ美少
 年よりけりと謬思もあるべし。介程小五足齋の朱之介と相俱して政朝許

東小はれ。政朝則。客の回。召入れて。其子志賀。政賢と共。侶出。て朱之。父。對面。と。當下。吾足。齋の。邊。額。と。衝。て。昨日。御内。意。と。兼。ま。り。思。息。未。朱。之。父。晴。賢。と。召。俱。と。と。い。ひ。る。れ。と。い。も。果。然。朱。之。父。の。膝。行。頓。首。を。ける。お。小。造。り。と。政。朝。の。朱。之。父。と。熟。々。相。る。ふ。最。優。形。る。少。年。を。れ。憶。を。眉。ま。り。頻。卑。て。朱。之。父。向。ひ。て。の。争。和。殿。も。豫。せ。れ。け。ん。今日。の。試。較。も。晴。技。を。困。守。高。類。み。づ。ら。御。覽。せ。ら。る。と。當。番。中。の。武。勇。の。少。年。四。十。名。と。揮。出。て。弓。馬。擊。劍。槍。棒。白。打。各。得。る。所。と。り。勝。負。を。定。め。ら。る。和。殿。の。員。の。外。中。で。件。の。隊。の。外。中。も。然。る。の。本。事。も。ら。る。咄。當。汲。引。と。致。し。が。ら。る。實。小。試。較。を。願。う。や。と。問。は。れ。朱。之。父。頭。を。拾。け。て。然。し。武。藝。の。好。所。を。年。八。九。の。時。より。と。習。ひ。ぬ。と。い。ふ。性。鈍。け。し。人。並。を。今。猶。修。終。の。最。中。お。は。り。開。が。中。お。弓。馬。の。人。小。讓。る。も。い。ら。る。と。雄。々。と。答。へ。

車下。傲慢。庸人。る。と。い。は。る。政。朝。屢。辱。領。て。それ。で。こ。安。堵。され。是。る。世。郎。志。賀。父。も。今日。の。撰。擇。お。入。れ。ら。る。と。い。は。れ。試。較。の。准。備。進。退。を。志。賀。父。お。守。ね。う。と。諭。し。又。吾。足。齋。お。う。ち。向。ひ。て。和。老。の。古。又。の。果。る。も。終。日。お。小。在。人。の。要。る。宿。所。お。退。り。と。吉。左。右。と。候。て。便。宜。を。な。れ。と。い。は。れ。吾。足。齋。歡。び。兼。て。い。ら。る。宜。し。と。心。を。ま。れ。朱。之。父。も。主人。父。子。お。う。ち。向。ひ。て。口。誼。を。演。る。開。が。程。小。兩。個。の。若。黨。艾。余。と。り。來。て。這。客。親。子。小。座。席。の。更。お。注。け。ら。ち。向。ひ。て。准。備。宜。し。と。告。る。と。政。朝。う。ち。向。ひ。て。お。う。ち。出。仕。と。い。は。れ。志。賀。父。も。疾。直。ね。と。い。は。れ。吾。足。齋。お。お。辭。し。て。父。子。共。侶。を。盡。奥。お。退。り。と。い。は。れ。吾。足。齋。の。朱。之。父。と。留。め。る。と。い。は。れ。程。小。一。兩。時。間。お。宿。所。へ。と。を。罷。出。け。る。有。徳。一。程。小。志。賀。父。政。賢。も。お。退。り。と。い。は。れ。父。お。向。ひ。て。叫。く。や。大人。の。い。ら。る。思。食。け。ん。彼。未。朱。之。父。の。故。

皎き女子の愛を艶治郎之言語応答の浮薄なる武藝不勝れ
 者に似せ然るも今整ふ他を試較す君俱に我門に面目と失ふ
 もやいふも美御深念の秋と問は政朝沈吟とて余も我も亦そと思
 ぬふもらねども人へうち見ふもぬ者も昔の半若御苗子楠正行新田
 義治皆是美少年なり武藝千騎萬卒敵まふ足しふあり
 他其類るも御用不達者も薦奉て當家留め若亦不
 覺と取るありとも我力の及所あり其折れ追退けて當家譜弟の
 壮俊等の武藝を都鄙に知えの加旗他が昨日既君侯に
 上よりけふ今内ら省ながら然るも我目賤賤のありて吹率あるふ
 ありと知る人の知るべし然るも沾むとらと論せ六志賀又再議及
 仰定ふ理り是ふ就てもいぬ頃五足齋の女兒晚稻を娶ま

思ひの心恥し死感ひる死晚稻が悪瘡愈たりとも今其親と兄とを
 見て思ふ愛を死少女ありは其の美の御心安るると陪話れば政朝含
 笑て然るも其の我始より那婚媾を許さざりし所以ありて
 晚稻が悪瘡愈ると雪々後吾足齋を召近づて試ける小只是
 浮薄の小人なり遮莫其子朱之介の五足の實子あり乾兒あり
 と欲ふれば親に似ざる者らんと思ひの空負ゆく我も亦疎忽の夫是
 るとまづむむ吾郎の惑の醒たるも是我家の幸なるるといひ外
 面瞻仰て噫漫るる時もや移らん疾くといそぐて親子衣裳を改め
 供の若黨蒼頭準備の武器を多く持て朱之介と相俱多試験
 場の外をたけ然るも這賀曲膳政朝其妻云稔前小世と去る志賀
 父の外小兒子なり但年二十有餘る妻あるもその故は新婦を欲

其子志賀氏の為ふと云く婚縁を求めらるべし。話分頭小
 程大江杜四郎成勝峯張栄六郎通能の京師の旅宿と立去りて
 本月の上旬近江の観音寺の城下小来入ける。佐々木家の兵頭高
 嶋石見が好純の栄六の父の日の峯張九四藏通世が為中ら。兵法七
 書の弟子なり。通世が世と去り。後の胡越の似くるものと相
 訪ふともる。栄六も豫より其名を知らず。知りたれば先高
 嶋氏と訪ふ。彼人の意見が就く。萬事便宜するべしと云。其城内の
 我々甲乙と云く人小向く。石見氏の宿所小来り。姓名を告来意を演て
 對面と請ふ。好純も亦豫より。彼子あり。彼孫ありと知らざる。小あらし
 且バ。馳迎入れて對面を看茶の礼事畢りて。杜四郎栄六主僕と宿
 願の武者修行の也。且當家の武功と景慕の故。小幸小舊縁

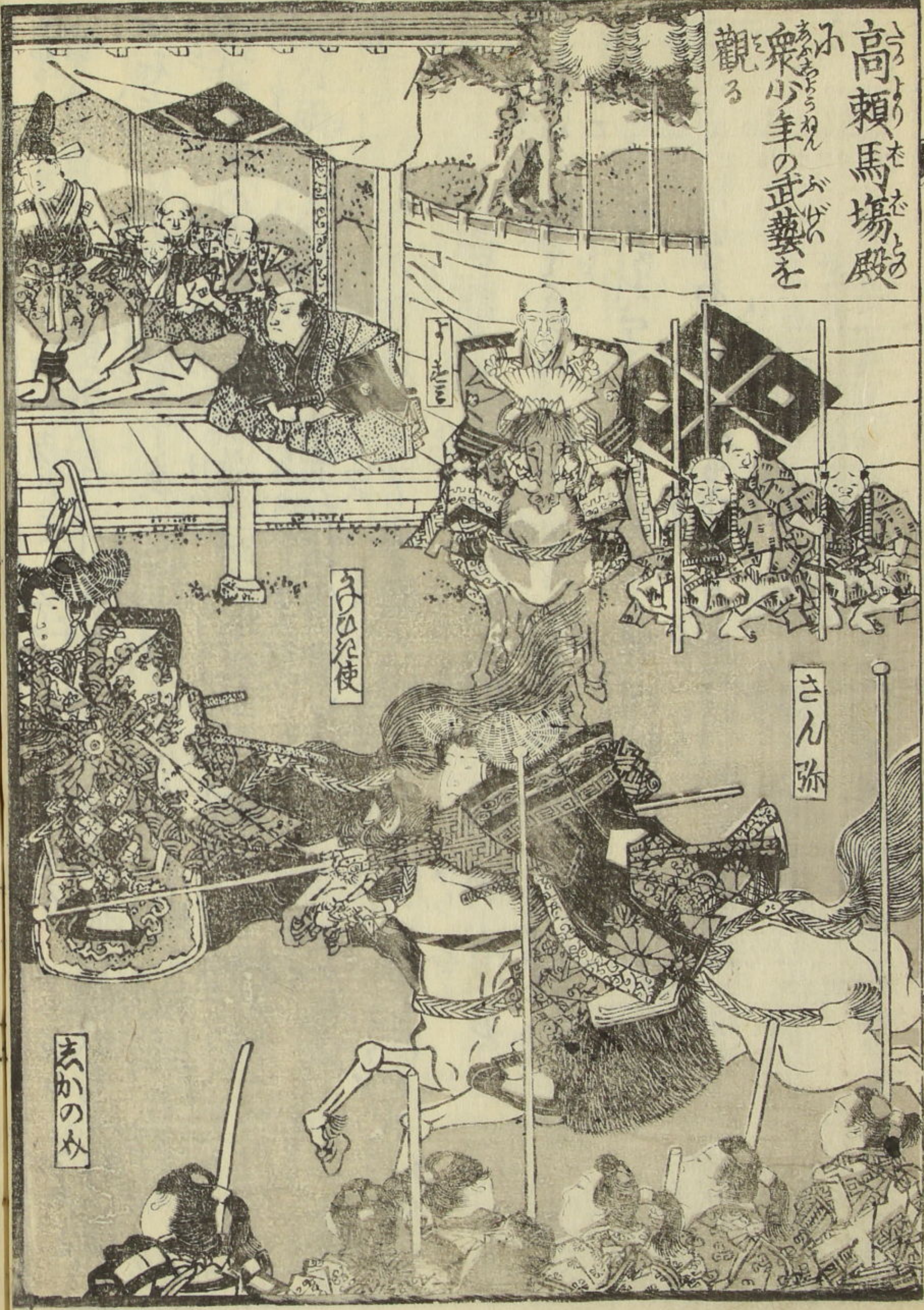
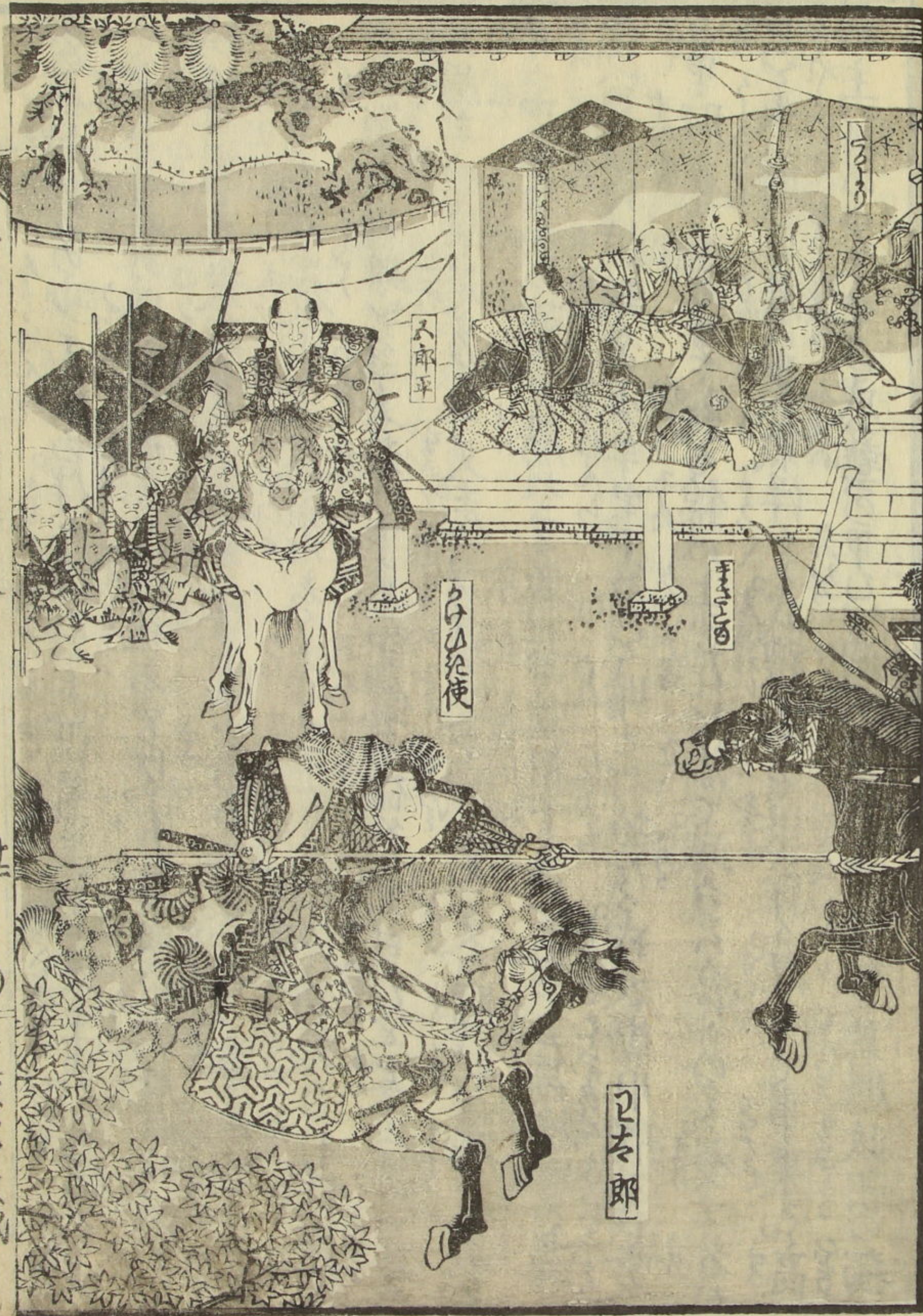
ある。主人の資助を借んと云。推参る。事情を演説可寧る。け且石
 見が款養して。そより訪れ。我身遊伴なり。時難波津小遊
 学も。峯張翁の教を受て。思ふ。今の昔小做らぬ。其小和殿等。高
 幼仙より。かぞ。送小面善る。ねと。栄六の祿の面影の故翁小よ。肖り
 矧又大江主の尊大人。昔我一面の好あり。小後奶々の不幸の風便小
 少。其比我も憶り。失粘失特の憂あり。小後家督を承嗣
 て。執務小暇ある。這里より浪華入路の程。三宿を。往還自由
 ら。年来疎濶。小思ひ。ける。面才子小訪。と。飲ぶ。れ
 外小宿りを求ん。幾ま。這里小居。せ。ゆ。せ。待。あ。る。也
 當は。潘中。忠義の士。武芸。修練の。杜。校。の。る。也。や。も。あ。ら。は。異
 日。面。會。の。ふ。と。損。友。の。あ。る。べ。し。且。甘。た。ぬ。也。と。云。小。家。の

老僕を召て乾浄なる小室へ件の主僕と誘引せて开里と起野の
 處と定め且湯浴させ膳を薦めり。款待特々淡くも介後主
 人の妻も出てその両少年の對面せり。少くも石見公好純の獨子あり。
 高嶋硯吉郎女純と喚做して今茲の十四五歳るべし。尚遊伴へ
 けり。當春主君の願ひ禀しつゝ所縁成就して周防の山口遣して
 遊学させ彼地にお在り。今の對面由るべきことも好純の任る所。長橋
 倭太郎勢が泰及兵法の弟子る所。象船兼弥知量と喚做して
 共ふ十七八歳る。義勇の両少年あり。困守の近習りければ勤仕の暇
 あは毎朝とるく夕とるく高嶋の宿所へ詣來て師説を受るる日の
 ければ大江峯張兩主僕へ一番言語と交へし。迭々其才其智を愛て
 捨が死思ひあり。只是のまあらざると好純の弟子も亦弟子るるも。

親しむ聚ひ來り。文と談し武と講ぶ。其才大江峯張の石見
 るるる。左右も程小困守の命あり。當城内の壯俊等の武藝を
 御覽あるべし。豫より下知せられける。其撰擇不充らざる少年等皆
 勇立て秘言古不暇るる。西郎來六を羨とて石見公請ふ。好純
 由亦這少年等の做するわんと思ひ。恥て主君不許え上て既不免許と
 ゆるり。當日の准備武器身甲衣裳兵鞋に至るまで。主僕盤纏不
 匱一かね。思ひの隨小相整正て其日と遷しと候りける。却説是年の秋
 九月十五日。當國守佐々木六角彈正大弼源高頼主。高頼或は左衛門
 進正の親。時の人相稱て。軍旅の暇あるも。城内の少年等の武藝を檢覽
 せし。本日已の比及も。儲の架屋小着坐あり。其事の為。縦六十間
 横九間。走馬場の中央。五間四面の架屋あり。俗に云馬見所。即是

四目結の花號... 裡面少の金屏... 戴て。縹緋細の時服... 扇と把つ件... 典膳政朝高嶋石見... 二十條弓矢... 東西四十五夫... 名東の方... 幕と曳鏡り。裡面少の細縁の薄席...

竟る良馬四十餘頭... 立て立ちけり又只是... 連れて西の方... 柄の両刀と跨へたる... 是日試敷の進退... 立ち約莫試敷の少年... 隊配等雨... 這那里小咲乱れる... 白の真紅... 衆を俟り... 其方さ由の人々...



高頼馬場殿
 衆少年の武藝を
 観る

その他試験の少年等の伴當奴隸夫役等も各其主引添ふる。咸
東西の幕府の内外の集合て混雜をける。有徳而の朝辰の時候より
試験を創りて東西の少年等豫より定めらるる。一番二番の次第と文余
さぞ鬼大鼓の從て東西亦出でて來り或は劍法槍棒白打送水等
る所とて雌雄を争ふ者二十番記録の祐筆其甲乙と字つけて主君の
呈圖あるける。是より又走馬の遲速を試し更ハ關射の勝負あり
升ぐ中ハ弓矢の故実ハ勝れる者共ハ立掛十番と射て君の檢見あり
備へける然ハ試験の少年等の日と晴と打扮たる戎衣勒肚腰刀衣裳
甲胄衣に至るまで孰も錦の上花と添て疎るる。肩ふる者の
色を失ひ勝たる者の意氣洋洋々と式禮を退ける。既而て事果高
頼主ハ件の少年等の武藝の甲乙を圖しハ就中賀典膳政朝の獨

子ある。志賀父政賢并ハ高嶋石見ハ好純の侄なりける。長橋倭太郎勢泰
及其弟子象龜并ハ知量等ハ試験の本事拔萃也。射藝ハ亦人ハ
譲らる後と取るに絶てられ。高頼感悦大なるを射て架屋下
せ。嘗て當坐の牽物ハ有名の刀各一口と被けさる。ハ政賢勢
泰知量等ハ時の面目身ハありて共ハ君恩と拜し見る者けく者
嘆賞して差まざるるけり。當下典膳石見ハ俱ハ席と降りて
拜く。政賢勢泰知量等の為ハ恩賜の飲也。稟果て又ハ。昨日も
えまら。如く浮浪武者修行の少年の武藝と御覽あり。既ハ今
朝より召俱して東西の集會所ハ在り。臣政朝ハ因て今日の試験ハ願
ふ者ハ當城外の醫師也。喜足齋延明の乾兒とやえ。末末之ハ暗
駄見及臣好純ハ舊縁の両少年大江杜四郎成勝峯張末六郎通能等

即是之計ひひんや。と言語齊き請稟せ高頼や。點頭。現
 然者もあひける。支小紛れて忘れ。遮莫我家の少年等の試較。既
 支果なる。敵とて。其少年等と相番せ。弓馬槍法を
 一覽。艾約莫。而軍相逢。時遠。矢を射。敵の一陣。と乱。近
 れ。必槍。突。勿論。今。の戰場。士卒。の器械。弓矢
 と槍。是。勝者。何。其。少年。等。準備。を急ぐ
 下。の。餘。の。箇。様々。如此。致。言。語。急。追。吟。吟。
 政。朝。好。純。美。猶。由。架。屋。小。竹。志。賀。人。と。倭。大。郎。心。果。て。東。西
 趣。云。云。と。示。し。て。準備。を。急。が。れ。志。賀。人。と。倭。大。郎。心。果。て。東。西
 集。會。所。走。去。り。け。り。是。の。後。時。と。相。呼。ひ。共。侶。小。扇。と。拵。拵。拵。拵。
 進。退。使。の。老。兵。二。騎。馬。と。東。西。不。兼。駐。て。東。の。少。年。末。晴。賢。西。の。少

年。峯。張。通。能。出。て。勝。負。を。決。せ。と。相。呼。ひ。共。侶。小。扇。と。拵。拵。拵。拵。
 早。打。鳴。と。鬼。大。鼓。の。鼓。々。々。高。音。と。共。東。西。齊。一。馬。と。拵。拵。拵。拵。
 張。の。見。の。打。扮。正。是。一。對。也。黒。草。絨。の。身。甲。元。胆。腸。綿。桂。小。金。囉
 妙。の。戰。絶。元。青。蝦。の。加。裙。袴。と。穿。下。し。て。頭。の。裏。銀。多。戰。笠。と。戴。た。り
 る。腰。小。兩。刀。と。跨。做。し。て。甲。胛。衣。も。黒。泥。と。要。と。馬。を。徐。々。と。拵。拵。拵。拵。
 東。西。俱。小。腰。鞆。の。各。二。條。の。習。字。槍。と。拵。拵。拵。拵。馬。を。徐。々。と。拵。拵。拵。拵。
 一。箇。是。白。面。の。美。少。年。臥。登。燈。の。眉。丹。花。の。脣。女。子。小。を。見。ま。す。昔
 鞍。馬。の。御。曹。司。も。か。や。と。思。ふ。可。多。一。箇。の。亦。回。也。勇。士。の。其。聲。威
 風。凜。然。回。の。色。淡。桃。紅。る。星。眼。清。く。鼻。高。く。肋。骨。の。逞。け。昔
 筑。紫。の。八。郎。主。及。ぶ。事。也。必。覚。あ。る。者。ら。ん。と。衆。人。固。唾。を
 飲。ぬ。い。る。登。下。朱。之。众。晴。賢。の。敵。の。姓。名。記。憶。も。彼。十。三。屋。九。四。郎。の

弟よりと豫て山峯張本六るのけれ且驚馬且怪心十二金鬼
 胎あり他のつめて今日の試敵も召入られらると思ふのく高毛の控
 まま素より無敵の豪奸れの肚裡か又思ふ。往る夏の夜彼奴れ為
 追逼られ。彼財囊を採復されの所以あり。其打我身寸鉄
 且牢獄疲労せ。替力衰へれ。先度の遺恨を復せんと。只の一
 拳ふとと尋思とあつて之騒ぐ。亦朱之の姓名を今
 笑より。訝てさる其面影と見れば果して其入。今日の敵もいふ
 彼奴れ逢ふを幸ひると思ひの随ひ突伏く。時宜依ら。住居夜艾の
 二百九十五金のもの責問を己と思へ。勇氣十倍して既我むる馬の
 脚搔小鏡兒の音も鈴々と臨機应变便宜と料る。智あり忠あり遠慮
 あり。勇士の心と表裏も朱之介の馬を扱め。東西齊しく加木屋の白ひて

馬上の式禮形の如く。両拍打れて馳達せ。二馬の駿足目覚し。駈て乗
 る者。兩云。遍程よく。兩敵相對して。聲と合せ。衝出せ。槍の梢頭の電光
 石火の閃やく。異るる。將去の槍の真物あら。梢頭。小迷の像に括り
 たる布の團囊あり。囊の内中。溢るる。蛤粉を多く籠入れ。衝る者。ち
 顯然と。その迹遺らる。の故。未峯張の衣裳も馬も東西都。黒
 糸を着用せらる。同話休題。介程。晴賢。通能の威力と。修鍊と
 盡し。挑戦ふ者。半晌許。劣ら。優ぶ。見ある。元自。朱之介。自得の藝術
 修鍊の上。も透回あり。又。朱六。師傳の槍法。藍より出。藍より。青に
 人。當千。り。けれ。晴賢。竟敵。ゆ。這里。と。衝。と。那里。と。突。れて。黒。衣
 裳。も。馬。さ。へ。只。雪。の。日。の。案。山。子。の。像。總。て。真。白。なる。り。け。り。
 下冊の編末。かくて。朱之介。晴賢。腕。乱。と。眼。眩。と。吐。嗟。目。今。馬。上。り。衝

落さるる見えりか。進退使の老兵扇と抗て。扇よや両少年もど止め。
 勝負の既分分明と喚つる聲と共侶の打出を銅鑼の御音に朱六も
 自由とほむ。今一も朱之介奴と衝落走らる。思へば不樂去
 ば。儘馬を兼退と。朱之介は是幸と一霎時馬上喘と止め。
 進退使もうち向ひ。御音も賀主の宗を如く。在下槍法の人並の
 本事の只是弓箭也。百發百中の段あり。この這次の試敷も。
 射藝と試あり。と聲振絞りて乞求も。進退使微笑て開左も右
 ものるるべ。且退は。休息あり。といふ。朱六も會釋も。馳て東西別
 れ。集會所へ退く。お茶六も架屋の這方へ。下馬を笠を脱捨て。團
 守の面前を過り。其為体禮あり。と。言ひ。若るる。是より。
 架屋の君臣件の両少年の武藝と云云と批評。と。俱に笑局。入日刺

景の短秋の天未秋申。鎗々と遠山院の鯨音と俱に亦復打
 鳴。大鼓の徒。進退使の老兵二騎馬と東西小乗。知し。扇を
 啓。指招。東の少年未朱之介晴賢。西の少年大江杜四郎成勝。疾
 疾と喚。成勝晴賢阿と答て。東西齊しく馬と找る。打拵前と同ト
 から。立と腰刀と除く。の外戎装衣裳。両敵共。咸淡官縁。る。
 る。背白羽の箭と駝做して。左も。握太る。重藤の弓と推へ。桃
 花の肥て。逞。三歳駒馬。小雲珠鞍置せ。鞆寛小兼做した。両敵共。
 一對の美少年と見。あり。大江杜四郎成勝。骨法朱之介。小立優り
 其。面影の。最。美。威風凜々たる。凄。
 朱之介。其。眉目。其。似。美。天然。又。大江杜四郎。
 容止の。雪。中。梅。花。の。如。く。風。小。春。知。る。櫻。小。似。是。

思へども、辨ふべし時宜らざれば、其ふら箭を把抗けても、雲居迫の遠りける其鴈約莫十隻あり。架屋の邊を過る時、箭を挫抗きて投上れば、足中を驚く一行の鴈、乱れて降り来る。前程と量り、未大江克弯固めて、標と射る。修鍊違ひ、二隻の鴈地上に着、羽と隊干架屋、老黨近習、憶ひざる聲と合せて射り、と譽言ふ。登時、兩個の進退使の透さ、二隻の鴈と押そ、駈々架屋へて参りて、君侯小見甘なる朱之ぬが射り、一鴈の腹より背へ射られ、鮮血も塗れて既死なり。又杜四郎が射る鴈、片隻と縫ひて身と傷らね、逃まき欲する勢、高頼是等と得と見て、感悦持た、凌々ど且久く成勝晴賢、両少年の射藝、多くはかかれ、生難くして死易き。今回も成勝勝るべし。先づの旨と、酒下を仰進退使さるる、出て件の両少年、御意云々と宣示、其朱之ぬの金

其美御説でいとも、已ぢの感心、志下、何とるべ軍陣、敵と射る者、其箭、彼身と傷らざりて、鎧の袖と縫ふると、是と大功と、言ふ。且、翔鳥の殺さるも、猶易き。両敵、東西、馳違ふ、乱軍の中、小と、指を敵と射り、遂に、鴻鴈飛鳥の類、小あらざりて、目今成勝と、射騎の勝負と、試みる。是非如彼、箭の身と傷られ、死さるとも、然るべし。と乞求むれば、進退使、已と、仍も晴賢が、宣示と、所箇様々、と、言え上ま、高頼、主甘笑ひ、と、扱も、未奴が、口の強さ、よ、まるとも、今日の試、敵、人を殺さ、死、為、小、あ、む、を、然、ハ、鏃、を、抜、去、す、と、箇、様、々、小、計、い、ね、杜、四、郎、と、今、一、度、射、騎、の、勝、負、と、決、さ、る、も、よ、う、ん、准、備、と、せ、よ、と、言、ふ。の、進、退、使、額、衝、養、て、か、る、べ、し、知、ら、ぬ、い、と、も、鏃、る、に、箭、も、豫、も、聊、准、備、仕、ら、ぬ、と、應、て、駈、々、出、て、來、る、未、と、大、江、の、兩、少、年、の、再、度、の、御、説、云、云、と、言、語、急、迫、く、宣、示、さ、る、大、江、生、る、馬、上、の、闘、射、と

願わくは秋のふとや。と問はて杜四郎敢異議せむ。仰養りゆいぬ左中右
 も晴賢の隨意一箭仕りと。言大人一死即答進退使も感て。
 準備の征前と。一も是と。而少年亦一と。各先きの征前と見よ。
 鏑代も最小る。飄とてある故射て中るとも。彼身と傷らば。及て其迹
 分明と。故何と。飄の底穿る穴敷の。内中相灰粉と。龍たれ。勿論
 各二箭と。涯りと。射と。許さ。但一其箭と受る者。同さ。不便
 さら。前後の。圍小依る。一と。長短紙素と。末と大江。披き。朱之。伏
 長と。披き。て。夏の始。定め。られ。其。秋。大。なる。各。彼。前。二。條。と。小。盾。一
 枚と。受。取。り。左。り。と。披。き。鞍。の。前。輪。も。と。掛。て。馬。も。閃。り。と。踏。れ。ば。
 又。打。出。ま。は。鬼。大。鼓。の。音。も。烈。し。た。再。度。の。晴。賢。の。這。回。を。四。郎
 奴。小。白。泡。喫。せ。と。思。ふ。威。勢。阿。修。羅。の。像。く。馬。と。東。西。小。馳。錯。り

せ。透。間。を。射。ま。く。欲。ま。れ。も。入。江。の。騎。馬。の。達。者。也。馬。三。駿。足。多。け。ね。
 秋。の。胡。蝶。の。閃。々。如。く。風。小。木。の。葉。の。散。る。も。奔。蹄。進。退。自。由。を。行。は。し。
 猛。く。勇。め。る。晴。賢。の。ま。ま。前。程。と。見。る。も。勝。負。と。見。ん。と。衆。少
 年。も。伴。當。等。も。集。會。所。と。出。て。來。り。す。の。邊。邊。小。身。と。龜。ゆ。り。思。ふ。も
 又。況。峯。張。來。六。る。集。會。所。の。幕。の。外。目。も。揮。ら。ま。ら。見。る。在。り。
 然。ば。又。架。屋。る。主。も。家。隸。も。今。日。の。見。物。の。一。本。小。あり。け。り。と。思。ふ。ぬ。も
 ろ。れ。と。中。小。高。嶋。石。見。賀。典。膳。長。橋。傳。太。郎。象。船。等。弥。志。智。公。政
 賢。も。曾。根。見。五。郎。平。小。至。る。ま。で。免。許。と。被。り。席。と。乱。し。俱。小。架。屋。の
 檐。廊。の。左。右。不。出。て。是。と。見。る。折。ら。秋。の。夕。風。小。左。右。多。小。堤。小。色。を。増。ま。
 梢。の。高。は。丹。楓。葉。の。散。菟。り。ぬ。る。光。景。の。矢。塚。小。狂。赤。卒。の。群。飛。小。似。
 最。興。あり。有。斯。り。一。程。小。朱。之。伏。敵。の。人。馬。の。疲。勞。を。ま。ま。前。程。と。描。



朱之丸



杜四郎

飄箭を飛
杜四郎
朱之丸を射る

丁と射る。那時遅し。這時速し。杜四郎は片鐘と閃りと外に至妙の割
輕鞍鞵れと去てけし。末が射る。箭の徒に逢ふ。飛で落おけり。朱之介の
一の箭と射損。たれは心慌て。杜四郎が鞍局小居置る處を丁と射る。の
箭前と四郎の小盾と。發矢と受たる。神速精妙。其前後方。及復り。と
朱之介の馬の鼻面と。下高打。か馬の嘶。跳狂。て駐る。くもあらざり。と。
朱之介の辛く。して。兼鎮めて。おかし。をる。始の廣言。虚と多く。箭の既
盡。か且呆れ。且恥。て。姑且馬と駐り。在り。當下四郎成勝。の盾と。眞哩と。投棄て。
浦の晴賢。王送。小守の御意。因る。釣速。で。い。ハ。已も。一箭。前。あ。あ。ら。せ。ん。と。く。受
ぬ。との。せ。の。果。む。の。ふ。や。及。ぶ。と。朱之介。の。弓。と。兼。小。盾。を。取。り。と。俱。馬。と。を
找。ゆ。け。ぬ。の。段。爰。ふ。盡。か。ら。る。又。下。の。回。ふ。解。分。る。を。聽。後。か。り。

新局玉石童子訓卷六之十一終



